

とうきょう すぐわくプログラム実践報告書(八王子市)

施設名	津久田保育園
-----	--------

1. 活動のテーマ

<テーマ>

運動

<テーマの設定理由>

- ・現在戸外遊びでは鬼ごっこが人気であり、走ることや身体を動かすことを好んでいる。そこにボールやマット、ロープなどを用意することで、走る以外の様々な身体の使い方を経験することや、身体を動かすことの楽しさを感じられるようにする。

2. 活動スケジュール

- ・サッカーボール、ドッジボール、ロープ、マットを外倉庫で保管し、子どもたちが遊びの中で自由に使えるようにする。
- ・ボッチャボールは5歳児保育室に置き、子どもたちが自由に使えるようにする。
- ・パラバルーンはコーナー遊びとして、興味をもった子どもたちが触れて遊べるようにする。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・サッカーボール（大サイズ柔らかい）
- ・ドッジボール（中サイズよく弾む）
- ・ボッチャボール（小サイズゲーム性あり）
- ・マット
- ・ロープ
- ・パラバルーン

4. 探究活動の実践

＜活動の内容＞

「ボッチャボール」（赤玉6、青玉6、白玉1）

- ・5歳児保育室にボッチャボールのセットを置く。興味をもった子らに、「白玉に近かったほうが勝ち」という最低限のルールを伝える。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

・4名の子が興味を示しボールに触る。すぐに「赤と青チームに分かれよう」と提案があり2チームに分かれ、じゃんけんで順番を決めたり投げる位置を決めたりしてから遊びが始まる。

・投げたボールが白玉に当たると白玉が動き、それまで近くにあったチームから「白が動いたからやり直して」と意見があがる。しかし「白が動くのは仕方がない」と反論。すると「なら白い球を動かないようにしよう」と決まる。「先生テープください」と保育者からセロテープをもらい丸めて床とくっつけてみるが何度も何度も何重にしてもボールがぶつかると白玉は動いてしまう。

・子どもたちのアイディアが行き詰ったタイミングで、「他にもいろいろな種類のテープがある」と伝えながらガムテープ、ビニールテープ、養生テープ、両面テープを提供する。子どもたちは自由にテープを触りながら「これはベタベタするから強そう」「こっちはあまりくっつかない」などと粘着力の違いに興味をもち、どのテープが一番固定できるかやり取りしながら探求する。一つの種類をいくつも重ねたり、全種類を使ったり、つける順番を変えてみたりと試行錯誤していた。結果、ガムテープで球全体を覆いかぶせることで白玉が動かなくなり満足する。

・固定した白玉を狙ってゲームが続けられた。白玉が動かなくなったことで球が集まるようになると、勝敗を決めるためにどちらの方が近いかを言い合うようになる。指を広げて距離を測り、自分の方が近いと主張するがお互いに譲らない状況が続く。保育者が「長さを測るときに使う道具を知っているか？」と問い合わせてみると「ものさし！」と知っていた子が発言。保育者はすぐに6本の定規を用意する。

・子どもたちは勝敗を決めるため定規を使うとともに、保育室内の「もの」の長さに興味をもち様々なものを測り始める。ブロックの長さや箱の長さを測ってみたり、友だちを横に寝かせて定規を複数つなげて身長を測り比べたりする遊びへと発展する。

・別日には段ボールや椅子で傾斜をつくりどちらのボールが遠くまで転がるか、椅子の上に向かって投げてどちらがたくさん載せられるかなど遊びのルールを自分たちで相談して変えている姿も見られた。



5. 振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

- ・運動というテーマを設定していたが、子どもたちの興味や関心は運動機能や運動能力の向上という部分ではなく、「ものの性質」や「測る」という部分へと広がっていった。大人が計画していても実際の姿とは異なることがあり、保育者側も臨機応変に子どもの姿に寄り添っていけるようにしたい。
- ・大人が遊び方や使い方を伝えすぎないほうが子どもたちの探求心や想像力はより膨らんでいき、子ども同士のやり取りも活発になるのだと感じた。
- ・子どもたちの言葉や気づき、様子をよく見守り必要なタイミングで素材を用意したり、子どもたちがじっくり、ゆっくり遊びこめる環境を用意したりすることが大切である。
- ・はじめから大人が成功へ導くのではなく、子どもたちが試行錯誤しながら実践し、失敗や成功を経験できることが大切である。